



一般社団法人
うるわしの桜井をつくる会
〒633-0091 奈良県桜井市
桜井1259エルトさくら内
TEL&FAX:0744-43-7773
URL: <http://lets.some.jp>
E-mail: lets@some.jp

平成28年7月

うるわし通信

地方から日本を元気にする

うるわしの桜井をつくる会の総会が、6月12日（日）に桜井市立図書館で開催されました。

堀井良殷会長は、「地方が元気にならないと日本が元気にならない。文化庁は2020年までの4年間に、20万件の全国津々浦々での地域イベントを『日本の文化力』として発信することを提唱している。地域の活動や地域資源に光を当てる活動を進めていきたい。」と挨拶しました。



堀井会長の挨拶

浅川肇氏を議長に選出し、事業報告、決算報告、監査報告、人事案、事業計画案、予算案が提案され審議の後、全会一致で承認された。尚、今後の部会の名称及びあり方について、事務局より提案があり、内容面の見直しを含めて常任理事会で検討を進めることとなりました。

総会后、竹アーティストの三橋玄さんを講師に招いて、「竹アートから美しい竹林へ」と題した、講演が行われました。



講演会の様子

三橋さんのこれまでの竹に関わってきた活動を通じて、現在桜井を拠点に県内をはじめ全国的なつながりを持った取り組みについて、映像を使った分かり易い話に、参加者も大いに関心を持ち、環境を考える好機会を提供いただきました。三橋さんの講演概要は、次ページに掲載。（K）

竹アートから美しい竹林へ

何故、竹アートに取り組むようになったのか

20代はアジア、ヨーロッパなどを旅して過ごしました。旅を通して撮影した写真を東京で発表していた時、プロジェクターを使って映像として写真を見せることを始めました。そこにミュージシャンが加わり、写真映像と音楽のコラボレーション作品となり、それを観た人から音楽イベントでの演出やステージ制作の仕事の依頼が来ました。そうした中から私はスクリーン、と言っても普通のスクリーンではなく、動いたり、透けたり、人が入ったりできるようなスクリーンを作るようになり、空間全体を作るようになりました。

空間制作の仕事はさらに発展してステージそのものや商業空間、巨大オブジェなどを作るようになりました。それらを作る素材として布や金属などを使っていましたが、作品のクオリティーや質感、完成度の向上を求めるようになり、さまざまな素材を試みました。そんな中で出会ったのが竹でした。

始めて竹を切った時、私はなぜか「自分は竹の扱いを知っている」と感じました。習ったことも、本も読んだことはないけれど、自分の体が知っている竹の切り方、割り方、曲げ方……。私は不思議な安心感の中で竹を使い始めました。

竹は様々な意味で「身近」な素材です。まず、専門的な道具や設備、技術がいない。木を切るにはチェーンソーや引きだすためにワイヤーやウインチ、運ぶためにトラックやユニックなどが必要ですが、竹はノコギリ一本で切れ、一人で担いで運び出せ、普通車に積んで運べます。また、日本のほとんどの地域に生えている、という点でも身近です。さらには、ほとんどの場合タダで切らせてくれる。切ってくれたら助かるわ、切って、切って、と喜ばれる。お金がいない、という意味でも身近（手軽）です。

このように私には竹が非常に使いやすい素材でした。そして、自然の中に入って自分の手で素材を取ってこられる、というのは私にとって意味のあることでした。こうして私は竹を使い始め、使い続けることになりました。今からちょうど10年前のことです。

竹を通じて広がった世界

多くの日本人、そしてアジアの人、ヨーロッパの人、アメリカの人……。きっと世界中の人たちも竹が好きなようです。竹を使うようになってから仕事の幅が広がり、これまでになかった方面から依頼が来るようになりました。書道・茶道・武道・芸能など日本の伝統文化の人々、また自然志向の食材・飲食や農家の人々など。自然で安全なものを求め、伝統を見直そうという時流とも重なり、たくさんの方との出会いが生まれました。竹は様々な思いを重ねることができ、人をつなぎ、縁を結ぶものでもありました。



講師 三橋 玄(竹の國代表)



平城宮跡「天平祭」で制作した「四神」のうちの「朱雀」

竹アートから美しい竹林へ

竹やぶと竹林

竹は切らないと竹やぶになってしまいます。美しい竹林は人の手が入って初めて生れます。私は長い間、人間の活動は自然を破壊し、汚染するものだ、と考えてきましたが、人が自分のために自然を利用し、そのことで自然を助けることが可能なのだと、竹に触れることで初めて知りました。それは私の自然観、人間観を覆すことでした。

竹やぶが広がってしまった今では私たちは竹が勝手に広がってきたというイメージを持ちがちですが、竹は人が植えて広げてきたものです。原産地と言われる中国南部から海を越え、日本の広範囲に竹を植え育ててきたのは、他ならない私たちの祖先です。日本人は縄文の時代から竹を利用し、生活・文化・芸術の広い範囲に竹を使ってきました。人にとって必要な植物だったからこそ植えてきたのです。それをここ100年足らずの間にぱったりと使うことをやめ、切らなくなっていました。だから日本中に竹やぶが増えたのです。



静岡県立森林公園で制作したモニュメント「風の龍」

竹の國

竹と人の関係を考えたとき、私は自分が竹を使って仕事をしていく以上は、竹を切ることを美しい竹林につなげたいと思うようになりました。美しい竹林を作り、維持していくためには、ただ竹やぶを掃除するだけでは十分ではありません。私たちに使い道があり、使うために竹を切り、その結果竹やぶがきれいになる。そのような竹と人間の共生関係の実現を探ろうと「竹の國」という団体を作りました。

「竹の國」は現在、桜井と明日香村に3か所3種類（竹の種類ごとに竹林を作っています）の竹林を管理しながら、そこから出る竹材を使った活用方法の研究を行っています。現在はボランティア参加で活動していますが、竹という忘れられた資源、邪魔者扱いされている資源を活用し、地域に根差した産業を興していきたいと考えています。竹のかごや食器、花器、楽器などの商品の一部を会場に展示しました。竹を身近に感じてもらうと地域の小中学生を対象にした教室を開催し、授業も行っています。

竹林自体も資源と捉え、研修・教育・体験の場として竹林を活用する取り組みも、子どもたちや大学生、企業などを対象に進めています。

竹と同じように忘れられた地域資源である空き家にも着目し、去年は桜井駅近くの空き町屋を借り、自分たちの手で改修し、竹を使った内装を作り、展示やイベント、竹工芸のワークショップなどを開催しています。



竹の國の商品

本年からはお茶（茶道）にも取り組んでいます。お茶の道具には竹でできたものが多く、竹を愛でる気持ちには茶の湯の精神に深いつながりがあると思え、お茶を学ぶことは私たちの竹への取り組みの幅を広げてくれると期待しています。今年の11月には竹林での野点を計画しています。

竹は、人と自然の関係、地域のあり方を捉えなおす、身近な入口になると思います。そして各々に合った人それぞれの関わり方ができます。興味を持っていただければぜひ、私たちの活動にお気軽にご参加ください。

問い合わせ 三橋 玄 090-7173-7656 genmitsuhashi@gmail.com



お知らせ

- 桜井で屋台村の取組みが、月1回のペースで、マクアケ（MAKUAKE）マーケットとして始められています。新しい地域活性化の事業として注目したい取組みです。訪れてみてください。
日時 7月17日（日曜日） 10時～15時
場所 桜井駅南 アイビーボウル横駐車場 約15店舗程が出展予定
主催 MAKUAKE実行委員会
後援 桜井市商工会
地元をはじめとするこだわりの食材や手しごとのお店を集めたマーケットです。
このマーケットを通じて、桜井駅前の経済に新陳代謝とイノベーションをもたらす役割を担いたいと考えています。（チラシより）

- 熊野大花火大会見学バスツアー
日 時 8月17日（水） 集合・受付9時30分～ 桜井市役所出発10時 桜井市役所着18日03時
雨天順延：8月18日 料 金 ￥13,000（昼食・夕食付き）
申込み 一般社団法人 桜井市観光協会 ☎0744-42-7530

- 安倍の歴史を語る会
学説だけでなく後世に伝えたい話などをお聞かせ下さい。多数のご参加をお待ちしています。
日 時 8月27日（土）13時30分から 「芝村騒動をめぐって」 報告者 石井 一好
場 所 まほろばセンター市民活動交流拠点
問い合わせ先 浅川 肇 TEL：090-1961-6345

- 第55回桜井市夏季大学
日 時 8月28日（日）10時～14時30分
場 所 大神神社 大礼記念館
料 金 ￥3,000（参加費と昼食弁当）
講 演 千田 稔（奈良図書情報館 館長） 「磐余と聖徳太子」
講 話 森 清範（清水寺 貫主） 「命はほとけさま」
申込み 一般社団法人 桜井市観光協会 ☎0744-42-7530

- 図書館友の会
6月28日は三島由紀夫著『わが友ヒットラー』（新潮社）でした。7月以降は未定ですが、候補としてカント著『永遠平和のために』（岩波文庫）、樋口陽一
小林節共著『「憲法改正」の真実』（集英社）が話題に上がっています。会員の皆さんの積極的なご参加を期待しています。
問い合わせ先 浅川 肇 TEL：090-1961-6345

うるわし通信編集責任者
楠木 克弘
TEL 090-3284-0405

～編集後記にかえて～

1月号をもって休刊していた「うるわし通信」復刊にあたり、毎月10日発行を、今後は隔月1日発行とし、編集責任者を楠木克弘氏に交代します。楠木氏は永年、市職員として市域全般の地勢・歴史に明るく、特に観光文化の分野ではその経験を活かしてくれると期待します。

ともあれ、言論活動は即ち、市民活動そのものであります。いうまでもなく、市政、国情全般にわたって、事実に基づきながらも、時には遠慮のない意見を述べることは、民主主義の基本理念です。

編集部一同が豊かな紙面づくりにより、本紙を盛り上げることを期待して、バトンを渡します。永年ありがとうございました。（前編集責任者 浅川 肇）